

遠藤 環、『都市を生きる人々—バンコク・都市下層民のリスク対応』京都大学学術出版会、2011年、356p.

小川さやか\*

本書は、バンコクの都市下層民の日々を生き抜くさまを、彼らによるリスクへの対応過程として捉え、長期フィールドワークによるデータを駆使して実証的に明らかにしたものである。本書は、労働と居住という都市貧困研究の主要テーマを扱いながらも、従来研究にいくつもの見直しを迫り、独自の都市下層社会・経済論を展開する研究書となっている。本稿では、まず本書全体の問題設定が提示されている第1章を整理する。その後、第2章以下について、本書が従来研究の再考を迫っている点に注目するかたちで概観する。

都市貧困研究およびインフォーマルセクター（以下IS）／インフォーマル経済（以下IE）論は、貧困やISの把握・定義を目的とした議論が中心であり、その関心の高さに比して都市下層の生活と経済のダイナミズムを捉えた実証研究が立ち遅れてきた。IS/IE研究の主流派は長らく、伝統部門と近代部門、ISとフォーマルセクター（以下FS）といった二分法や、前者から後者への移行を発展とみなす単線的発展論、向都人口移動からISの生成を説明する枠組みなどに大きな変更を加えてこなかった。現在では、都市内部の階層性に目を向け、二分法を批判する実証

研究なども数多く存在するが、地理学的な研究を除けば、農村と都市の連続性のうえに、IS経済の特徴を文化・社会論に還元する議論が多い。またグローバル化や世界的な都市・産業構造の変容にIEを位置づけた世界都市論者の研究も結局のところ、都市経済の内部構造を明らかにする実証研究を進展させなかった。

これら広範な研究を渉猟した本書の問題意識とは、都市下層民の生活・労働の動態に目を向けず、開発潮流の変化や分析概念の創出・刷新に伴い、対象や課題を「都合よく」転換する政策・理論が、実態と乖離している点にある。

本書の独自性は、都市下層民のリスク対応過程、都市下層コミュニティ・IE内部の動態、マクロ構造の変動の3者を有機的に結びつけたことにある。その狙いは次の3点である。第1に、レイオフやスラムにおける住居の撤去、火災といった都市下層民のリスクへの遭遇とその対応過程に光をあてることは、必然的に従来の静態的な都市貧困論に動態的な視座を導入することになる。第2に、病気や怪我など個人レベルのリスクから経済危機や政治不安といった国家レベルのリスクまで、リスクの重層的な発生をみることは、都市下層民の労働と生活の内在的ダイナミズムと都市のマクロな変動との相互作用を射程に入れることになる。第3に、リスクへの対応能力の違いを分析することで、都市下層民を規定する脆弱性や内部の階層化が浮かび上がる。

第2章では、タイの都市貧困政策とスラ

\* 国立民族学博物館研究戦略センター

ム政策の変遷、およびその変遷過程で登場した IE 支援政策を、政策対象の実態に照らして考察し、それぞれの政策の意図と実態のずれを明らかにしている。

第 3 章では、調査方法と調査地である都心と郊外のふたつのコミュニティの概要が述べられる。これを踏まえて第 4 章と第 5 章では、コミュニティの職業と居住の各側面が掘り下げられる。職業に焦点を絞った第 4 章では、タイの文脈に即した職業階層分類が析出・設定され、各コミュニティの職業構成や各職業階層間やジェンダー間にみられる格差、人びとの職業選択理由など、第 7 章以降の分析の基礎となる情報が提示される。一方、居住を扱う第 5 章では、コミュニティの居住形態、居住空間としてのコミュニティの機能など、第 6 章での分析の布石となる情報が詳述される。

第 6 章以降が、住民のリスクへの対応過程に関する記述・分析である。第 6 章では、2004 年に起きた大火災の影響とコミュニティの復興過程が扱われる。都市住民の流動性を強調してきた従来研究の想定とは異なり、大部分の住民はさまざまな障害に直面したり、住居の再建案をめぐり分裂したりしながらも、焼け跡でのコミュニティ再生にこだわりをみせた。復興過程の追跡からみえてくるのは、さまざまなニーズや社会関係、機能が累積的・有機的に結合し、しっかりと都市に根を張るコミュニティの姿である。

第 7 章では、火災による職業への影響と階層化が分析される。火災は住居の喪失に留まらず、職業にも影響を及ぼした。特に居住

空間と密接にかかわる自営業者への打撃が甚大であった。高生産性自営業者は、低生産性自営業への事業転換や低生産性被雇用部門への参入を余儀なくされた。ここでは、伝統的な開発経済学で「上昇」とされる IS（自営業）から FS（被雇用部門）への移動が火災に伴う逆説的な対応として生じたこと、および人びとのリスク対応能力の差異と階層化が指摘される。

第 8 章では、女性のライフコースが丹念に分析される。特に 1990 年代のマクロ経済の再編の過程で工場を解雇された女性が、階層性を帯びながら IS へ参入していく過程が分析の中心になる。女性たちの対応は、学歴や資本などの個人条件だけでなく、世帯における役割や世帯内の協力関係の有無といった世帯条件にも規定されていた。女性が家計への貢献において補助的役割しか担わないという仮定は誤っており、彼女たちの家計への貢献は世帯の厚生水準に大きな影響を与える。また家計への貢献度が高く、世帯内協力関係が不均衡である女性ほど、現金稼得活動への制約条件が高まるという悪循環も示唆される。

第 9 章では、都市下層民の「上昇」イメージを、自立性と安定性というふたつの価値軸に着目して論じる。上述のように初期開発経済学では「上昇」とは、安定性の低い IS（自営業）から安定性の高い FS（被雇用部門）への参入を意味する。しかし被雇用部門のなかでも不安定な職種しか選択できない労働者にとっては、自立性を安定性より選好し、被雇用部門のほうを自立性の高い自営業の開業

資金を貯めるための一時的な待機地とみなす場合もある。さらにこの自営業内移動による「上昇」イメージも、学歴を武器に選択肢の限られた職業世界を抜け出すことを目指す世代で、変化することが示される。

終章では、各章の議論が整理された後に、著者による政策提言が試みられる。

以上みてきたように、本書では、従来の主流派の開発経済学やIS・スラム政策がいかにグローバル化に伴う諸現象の重層的な進展と都市内部の階層性を捉えきれていなかったのかを如実に示した。本書の知見の多くは、評者が研究対象とするタンザニアのスラムやIS研究をはじめ、タイの文脈を超えうる普遍性をもっているだろう。最後に、本書の価値を損なうものではないが、評者が感じた疑問について述べたいと思う。

本書がリスクとして明確なかたちで分析対象にしているのは、火災とレイオフのふたつである。しかし本書には、都市下層民が他にも多様なリスクを抱えているとする記述が散見される。また、個人や世帯レベルから地域や国家レベルまであらゆるレベルにリスクがあるとする記述もみられる。本書がどのような基準で特定の事象をリスクとして扱っているのかは不明瞭であり、リスクがブラックボックス化してしまっていないだろうか。

かつては人知の及ばない領域として考えられてきた事象の多くが、科学技術の発展や計画的な未来設計を可能とする均質的な時間管理の導入に伴い、予測したり管理すべきリスクとみなされるようになった。また社会の分化・制度化に伴い、リスクを予測したり管理

すべき主体が特定され、その達成の不履行に対して責任が問われるようになった。ここで監査文化や責任論について述べることは本書の議論から逸れるが、重要なことは「リスク」とは普遍的な実体ではなく、政治性を帯びた近代的な概念であることだ。つまり、特定の事象をリスクと位置づける試み自体が逆に、特定の現象へのローカルな対応のダイナミズムを捉えそこなう危険性もあるのではないだろうか。

たとえば、第9章の都市下層民にとっての「上昇」において、安定性より選好される価値は、自立性の他にも数多く想定できるように感じられた。彼らの人生観や職業観に取り込まれたとき、それが「リスク」とみなされるかどうかは、スパンやタイミング、危機の度合や対応能力による違いだけでなく、「どう生きるか／いかに生きたいか」にかかわる本質的かつ本能的な問いでもある。

リスクを切り口にこのような問いを深めていくことは、第1章で切り捨てた「文化や社会の議論に収斂しがちなIS研究」や、農村と都市との連続性／不連続性に関する議論をふたたび本書の射程に組み入れ直すことにならないだろうか。また、リスクや不確実性に関する理論的研究に取り組むことは、政策と実態に異なって作用する、近代化やグローバル化の「正体」を突き止めることにもつながるだろう。

とはいえ、このような問いを、都市人類学を専門とする評者に抱かせたことこそ、本書がすでに研究分野の壁を乗り越えていることの証左かもしれない。本書が地を這う努力に

よって価値の高い実証データを提示し、「内在的な視点」から都市内部の階層化やIS経済のダイナミズムを論じる意義を打ち出すことに成功していることは間違いない。データや事例が語ることから実のある理論を紡ぐという著者の姿勢には深く共感するし、学ぶことも多かった。本書は実証研究の底力を知ることのできる研究書であるだろう。

金子守恵、『土器づくりの民族誌—エチオピア女性職人の地縁技術』昭和堂、2011年、viii+287p.+xii.

木村大治\*

表題に明快に示されているように、本書はエチオピアにおける土器製作の民族誌的記述である。エチオピア南西部に住む民族集団アリは、農耕活動をおこなう人々「カンツァ」と、物作りをおこなう職能集団「mana」に二分されるが、本書は「mana」の内の土器作り集団「ティラmana」を対象としている。土器作りをおこなうのは、もっぱら女性である。製作は個人単位でおこなわれ、できた土器は定期市に持って行って売られる。このように高度な産業化に至らず、社会に埋め込まれる形でゆったりとおこなわれている物作りを、本書では「地縁技術」と呼んでいる。

著者・金子守恵氏は、1998年からアリの土器作りの調査をおこなっている。本書はその調査の成果として2005年に提出された博

士論文がベースになっている。それではまず、目次から本書の内容をみてみたい。

はじめに 一どのように土器をつくっているのか？—

第一章 土器をつくる身体と生活のなか  
いきる土器 第一節 ものづくりをめぐる研究 第二節 研究目的と方法  
第三節 調査地概要

第二章 つかう 第一節 土器のつかい方  
と所有個数 第二節 土器の分類・命名  
第三節 一部の世帯で所有されている土器  
第四節 土器の購入 第五節 創りだされる土器の種類

第三章 つくる 第一節 粘土の採取から、  
成形、焼成まで 第二節 土器の成形過程—  
「指使い」による成形過程の記述  
第三節 成形過程の比較 第四節 土器をつくる身体

第四章 知る 第一節 技法の獲得と土器  
づくりを知っていく状況 第二節 土器  
づくりを知っていく—三年間の記録  
第三節 土器づくりを知っていく過程—  
SとG村の一二人の娘の事例 第四節 ま  
とめと考察

第五章 かわる 第一節 結婚と土器つく  
り 第二節 職人のライフヒストリー  
と土器づくりの変遷 第三節 職人の  
テクノ・ライフヒストリー 第四節  
テクノ・ライフヒストリー—人生の軌  
跡に技術の変化を跡づける試み

第六章 うる、創る 第一節 生業として  
の土器づくり 第二節 土器をめぐる

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科